

## 20世紀初頭のアメリカ西部にバスク人が生産したエスニック景観：ネヴァダ州エルコの事例

著者	石井 久生
雑誌名	共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要
巻	27
ページ	143-161
発行年	2021-02
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00003410/">http://id.nii.ac.jp/1087/00003410/</a>



# 20世紀初頭のアメリカ西部にバスク人が 生産したエスニック景観

—ネヴァダ州エルコの事例—

石井久生

## 1. はじめに

スペインとフランスの国境付近に住むバスク人は、かつてその多くが新大陸に移住した。18～19世紀の主たる移住先は、当時スペイン領で移住が容易であった中南米であった。しかし19世紀中ごろから、アメリカ合衆国西部（以下「アメリカ西部」）へも移住するようになった。そこへ移住したバスク人は、移民街を形成するほどの大集団ではなかったものの、独特のコミュニティを形成した。

筆者はかつて、アメリカ西部の2つの都市、ベーカーズフィールド Bakersfield とボイジー Boise に形成された20世紀初頭のバスク人コミュニティを、地図として再現した（石井2015）。そこで明らかにされたのは、一つの都市内にバスク人が経営するバスクホテルが複数登場し、そこを活動の拠点として形成された独特のバスク人コミュニティの姿であった。カリフォルニア州南部の地方都市ベーカーズフィールドは、アメリカ西部において最も初期にバスク人が入植し、牧羊業の拠点が拓かれた都市であり、20世紀初頭にはバスクホテル網が構築されていた。アイダホ州の州都ボイジーは、バスク人の牧羊ルートの北端付近に位置し、周囲には鉱山が多く立地するため鉱業労働者も入植したが、1910～1920年代はバスク人羊飼いが多数入居するバスクホテルが複数立地し、バスク人コミュニティが形成されていた。

こうした移民の歴史の古い都市の研究では、資料として活用可能なのは当時の統計、地図、住所録などに限られる。そのため、前述のベーカーズフィールドやボイジーのエスニック景観もそうした資料を頼りに再現した。しかし、数こそ少ないが移民第一世代は未だ存命しているので、彼らに対して聞き取り調査を実施すれば、得られる情報の質も異なってくるだろう。バスク人の移住は1970年代末には収束しているので、現在存命の第一世代は、1950年代から1970年代に移住していることになろう。その時期に移住したのであれば、彼らは20世紀初頭に移住したバスク人と接触していた可能性があるし、そうであるなら初期入植者から得た情報を記憶しているはずである。いづれにしても、1950年代に10歳代で移住したとしても現在は80歳代に達しているはずであるから、この作業は急いで実行に移す必要がある。

そうした観点から注目したのが、ネヴァダ州のエルコ Elko である。エルコは、ネヴァダ州の北西部、グレートベースンのほぼ中央に位置する内陸都市である。バスク人はここに19世紀後半から入植しコミュニティを形成してきた。その実態を前述のような各種資料から明らかにすることは可能であるが、エルコの場合、移民第一世代が一定数在住しているため、彼らから得られる情報を加

えることができる。したがって本研究は、ネヴァダ州エルコに20世紀初頭に生産されたバスク人コミュニティのエスニック景観を、当時の地図や統計などの情報を活用しつつ、聞き取り調査により得た情報を加えて明らかにすることを目的とする。

## 2. アメリカ西部のバスク人とネヴァダ州入植前史

現在のアメリカ合衆国には、バスク人をルーツとする人々が約5万人存在する。彼らの分布の地理的偏りには特徴があり、アメリカ西部に多くが居住する（図1）。American Community Surveyによれば、2016年時点で最大の集積地はアイダホ州の州都ボイジーが位置するエイダ郡 Ada Countyで4131人、2位はネヴァダ州の州都リノ Reno が位置するワシヨエ郡 Washoe Countyで2128人、3位がカリフォルニア州のロサンゼルス郡で2125人となり、本研究の対象地であるエルコが位置するエルコ郡は14位の767人である。バスク人はそれぞれの都市において都市人口の1%にも満たないマイノリティ集団であるが、彼らの強い結束は同胞組織や祝祭など随所に観察することができ、強い個性を放っている。そうした彼らの移住の歴史も個性的である。

アメリカ合衆国にバスク人が入植したのは19世紀半ばであったが、故地のバスク地方からアメリカ西部に直接移住したわけではなかった。彼らは南アメリカ大陸のラプラタ川流域にそれ以前に移住し、そこを經由して再移住してきた再移民であった。

19世紀前半、ラプラタ川流域のアルゼンチンやウルグアイは、他の多くの中南米諸国と同様に宗主国スペインからの独立を果たした。独立後、両国のラプラタ川流域に広がる大草原パンパにお

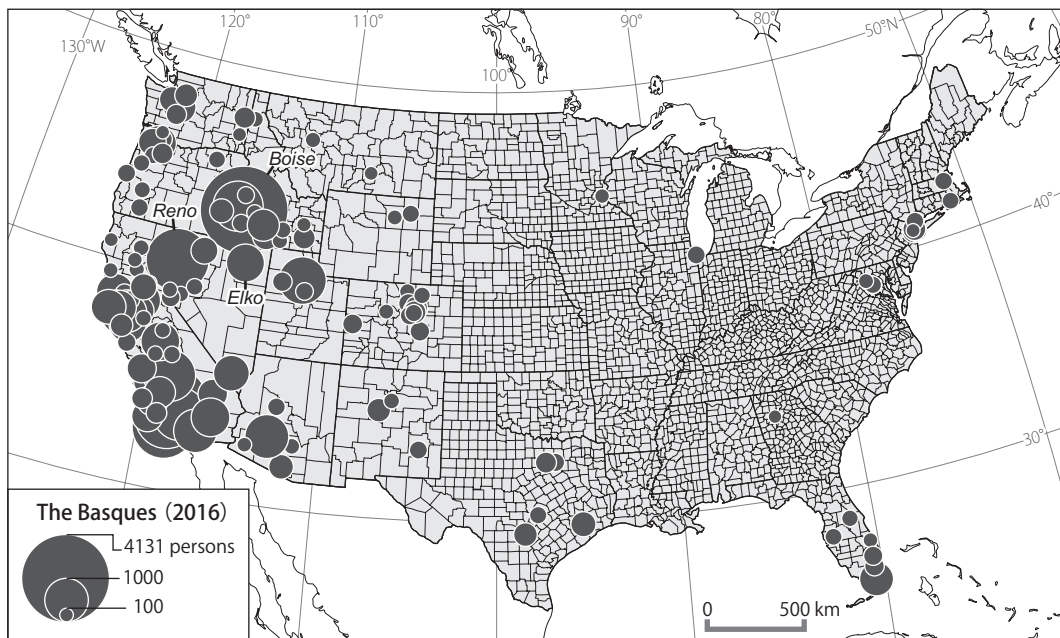


図1 バスク人のカウンティ（郡）別分布（2016）。

出典： American Community Survey (US Census Bureau)の資料により作成。

いて、先住民マプチェ族の排除が進むと、牧畜業が発展した。しかし、牧畜業の成長が急速であったために労働者が不足し、さらにヨーロッパの産業革命により羊毛の需要が世界的に急増したにもかかわらずラプラタ川流域では牧羊産業が未熟であったため、そこにバスク地方の農山村出身で牧畜の経験豊富なバスク人が参入するようになった。特に1840年代は多くのバスク人がラプラタ川流域に移住し、牧牛業や牧羊業に参入した。こうして彼らは、広大な草原地帯パンパにおいて羊の長距離移牧を実践するようになった (Azcona and Douglass 2004, 276-7)。アルゼンチン内陸部での羊関連産業のバスク人による独占も進んだ。特に羊肉の塩漬けと保存加工はフランス・バスクのラプルディ地方出身者がほぼ独占したといわれる (Totoricagüena 2005, 164)<sup>1</sup>。

この当時、バスク人のラプラタ川流域への移住には、移民を排出する側のバスク地方の要因もあった。第一の要因が当時の人口増加であった。この時期のバスク地方では、衛生環境や医療技術の改善にともなって死亡率が大幅に低下し、その結果人口が急増した。しかし、牧畜経済を主体とするバスク地方の山村部では、家畜飼育のため広大な用地を必要とし、土地の分割相続は制限された。そのため、その恩恵を受けることのできなかった者はバスク地方外部へ移住せざるをえなかった。第二の要因は、バスク地方を取り巻く政治的動乱であった。19世紀前半のスペインは戦乱が続き、バスク地方はスペイン独立戦争(1808-1812)、第一次カルリスタ戦争(1833-1839)の主戦場のひとつになった。1876年に第三次カルリスタ戦争が終戦するまで続いた動乱では、敗北したカルリスタ側を支持してきたバスク地方は、中世以来中央政府から認められてきた地方特権フェロスをほぼ完全に撤廃されたうえ、それまで免除されていたスペインの徴兵制度に組み込まれるようになったことも、移民を促す大きな要因になった<sup>2</sup>。

ラプラタ川流域からアメリカ西部への再移住のきっかけは、カリフォルニアのゴールドラッシュであった。アメリカ合衆国に領土編入されたばかりのカリフォルニアにおいて、1948年に金鉱が発見されゴールドラッシュが起こった。これを契機にラプラタ川流域をはじめ、当時バスク地方からの移民が定住していたメキシコやキューバなど中南米各地から、カリフォルニアにバスク人が移住するようになった。ただし、バスク地方からカリフォルニアへの直接移民は、大陸横断鉄道が開通するまではほとんどなかった。

カリフォルニアへ移住したバスク人は当初鉱業に参入したが、当時のゴールドラッシュは長続きせず、彼らの多くは成功と無縁であった。そこで彼らは、ラプラタ川流域で実践していた牧畜業をカリフォルニアで展開するようになった。ちょうど1850年代から1860年代にかけて、カリフォルニアでは人口増加とそれともなう食肉需要の増加により畜産業が発展した。食肉需要の中心は牛肉であったため牧牛が盛んに行われたが、人口増加ともなう羊毛需要の増加が牧羊の発展を後押しした。これにより牧羊業と羊毛産業は、当時のカリフォルニアの重要産業に成長した。

バスク人は、南カリフォルニアの牧羊業において1850年代にはすでに確固たる地位を確立していた。バスク人羊飼いは、乾燥した南カリフォルニアの自然環境に適応した季節的な長距離移牧様式をすでにこの時期に確立していた。当時の彼らの移牧は、セントラルヴァレー Central Valley (図2参照)を中心に展開された。彼らは冬季、セントラルヴァレー南部のサンホアキンヴァレー San

Joaquin Valley において土地を賃貸あるいは購入し、そこで羊群を飼育した。冬の終わりから春の初めが羊の出産期にあたるため、冬から春の初めにかけての時期は長距離移牧には向かない。そのため羊群と羊飼いはこの時期サンホアキンヴァレーのベーカーズフィールド付近に留まった。そして羊飼いは、春に入ると大きくなった羊群をともない移牧を開始し、夏にはセントラルヴァレーの東縁に沿って走るシエラネヴァダ山脈 Sierra Nevada 付近の高地の公有地へ移動した。富を蓄積して経済的成功を取めた一部のバスク人は、サンホアキンヴァレー付近の土地を取得し、羊飼いを雇用するようになった。羊飼いは地縁や血縁があり信頼のおけるバスク人を中心に雇用された (Douglass and Bilbao 1975, 299-300)。ただしカリフォルニア在住のバスク人では限界があるため、当初はアルゼンチンなどの中南米から、大陸横断鉄道開通後はバスク地方からバスク人が呼び寄せられるようになった。こうしてアメリカ西部とバスク地方を結ぶバスク人の連鎖移民が確立された<sup>3</sup>。

セントラルヴァレーを中心に展開されたバスク人羊飼いによる移牧は、1860年代には過密状態

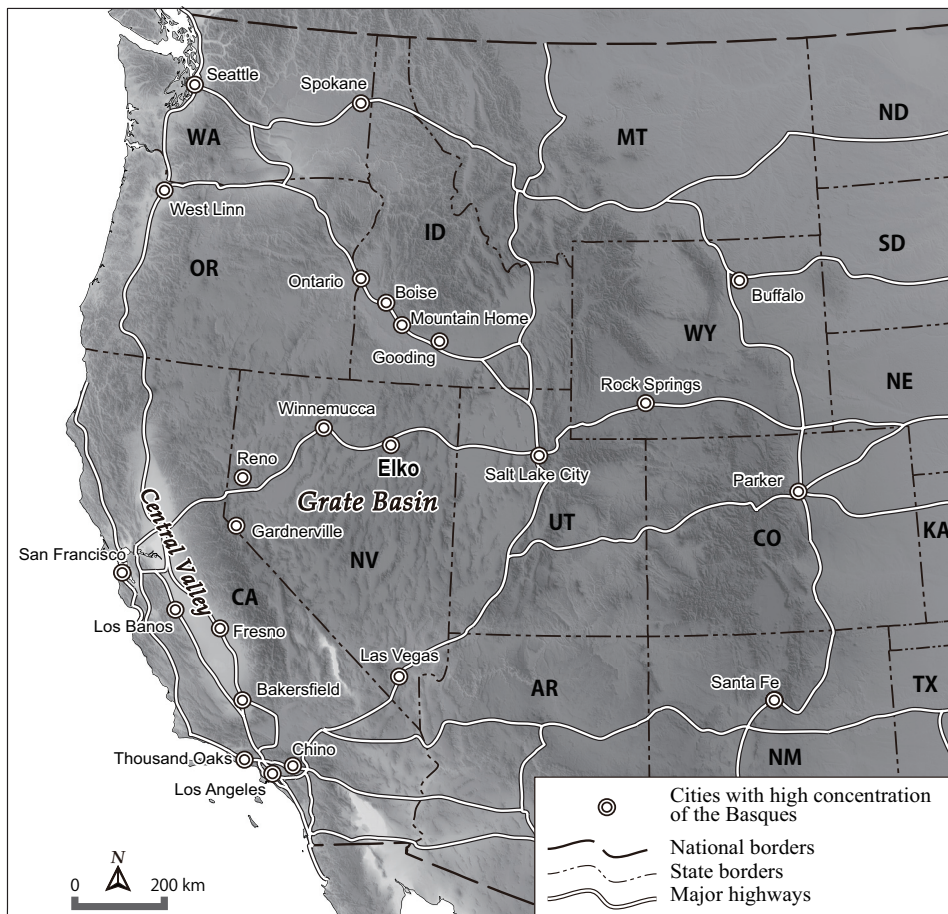


図2 アメリカ西部のバスク人集住都市。

出典： Euskaletxeak.eus (バスク州政府HP) の資料により作成。

となった。そのため彼らは、1870年代にはシエラネヴァダ山脈を越えたネヴァダ州やアリゾナ州へ、さらに1870年代後半にはネヴァダ州北部、オレゴン州南東部、アイダホ州南部にかけて広がる乾燥した盆地帯であるグレートベースン Great Basin (図2参照)に進出するようになった。ちょうどこの時期、大陸横断鉄道によりグレートベースンが西海岸と東海岸の大市場と結ばれたことも、バスク人羊飼いのグレートベースン進出を促進した。

### 3. エルコとバスク人の歴史

エルコは、ネヴァダ州の北西部、グレートベースンのほぼ中央部の標高約1500mに位置する内陸都市である(図2参照)。19世紀前半に東部からカリフォルニア方面への入植者が通過したカリフォルニアトレイル California Trail上に位置するが、1849年のゴールドラッシュ以降は同トレイルの通行者が増加したにもかかわらず、乾燥の厳しいこの場所に集落が形成されることはなかった。

エルコに住民が定住するようになったのは、カリフォルニア州からユタ州に向けて延伸してきたセントラルパシフィック鉄道 Central Pacific Railroad がエルコまで開通した1868年12月であるとされる(Hall 2020, 110)。同鉄道会社の不動産部門が集落中心の土地区画を売り出したのが翌年1869年の1月15日で、その後エルコは、南東約100kmに位置する現在のホワイトパイン郡の鉾山の開発の拠点、さらには西海岸の主要都市に食肉や羊毛を供給する牧場経営の拠点として機能するようになった。ただし人口増加のペースは緩やかで、センサスで人口が1000人を超えたのは1910年であった。

エルコ近郊にバスク人が入植するようになったのは、19世紀後半である(McCullough 1945, 28-29)。1870年代に数名のバスク人が郊外に牧場を入手し、牧羊を行うようになったのがバスク人入植の始まりである<sup>4</sup>。エルコ付近に最初に入植したバスク人は、羊飼いでなくカウボーイ、すなわち牧牛業者であったとされる。彼らは当初ゴールドラッシュの時期にカリフォルニアに入植し、そこからネヴァダ州に再移住してきた。彼らの先駆となったのは、Pedro Altube と Bernardo Altube の兄弟と、Jean Garat の一族で、Altube 兄弟はスパニッシュランチ (Spanish Ranch)、Garat 一族は YP ランチ (YP Ranch) の2つの大牧場を開拓した。YP ランチは牧牛が中心だったが、スパニッシュランチは1890年代から羊を導入するようになり、後にバスク人羊飼いをエルコ周辺に呼び寄せることに貢献した(Saitua 2019, 59)。

エルコにバスク人が集積する要因となった Altube 兄弟の牧場経営について解説しよう。Altube 兄弟の兄 Pedro Altube は、「アメリカ西部のバスク人の父 Father of the Basques in the American West」と呼ばれている。彼は1827年に現在のスペイン、バスク州ギプスコア県のオニャテ Oñate に生まれた。1845年にアルゼンチンに移住し、家族とともに牧牛業に従事し、1849年にカリフォルニアに再移住した。1851年には弟の Bernardo Altube もカリフォルニアに移住し、兄弟で牧牛業を開始した。当時のカリフォルニアでは、人口の急増にともない食肉需要も急増し、Altube 兄弟の牧牛業も成長を続けた。彼らのビジネスの中心はサンフランシスコの南近郊のサンマテオ San Mateo であったが、そこにはアルゼンチンから多くのバスク人が再移住し、牧牛業や食肉産業に

従事するようになった。しかし1860年代の気候変動や食肉価格の暴落、さらにはセントラルヴァレー南部を拠点として急成長を遂げたミラーアンドラックス Miller & Lux との競合が激しくなり、Altube 兄弟は新たな活路を見出す必要に迫られた<sup>5</sup>。

こうした状況下、Altube 兄弟はシエラネヴァダ山脈を越えて東のグレートベースンに進出した。1873年に彼らはネヴァダ州に定住し、現在のエルコの北西に広がるインデペンデンスヴァレー Independence Valley で牧牛業を営むようになった。これはエルコ郡で最初のバスク人による牧畜業であり、これに触発されて1870年代にはカリフォルニア州やテキサス州の牧牛業者がエルコ郡に進出するようになった。Altube 兄弟は複数の個人牧場と連携し、公有地を含めた広大な牧場スパニッシュランチを開設した (Peterson et al. 1969, 387)。1880年代までに同牧場はグレートベースンで最大規模の牧場のひとつに成長していた。そこで生産された牛肉は、セントラルパシフィック鉄道を經由してサンフランシスコなどカリフォルニア州内の主要都市に輸出された。

エルコ近郊にバスク人が集住するきっかけを作ったのも Altube 兄弟であった。Altube 兄弟は、当初牧牛業を中心にビジネスを展開し、多くのバスク人を雇用したが、その当時のバスク人の生業は羊飼いでなくカウボーイであった。それに牧羊業が加わり、バスク人羊飼いが増加する転機になったのは、1889年から1890年にかけてインデペンデンスヴァレーを襲った厳冬であった。この冬にスパニッシュランチでは約90%の牛が失われた (Douglass and Bilbao1975, 258)。これを機に Altube 兄弟は、牧牛業に過度に依存したビジネススタイルを転換し、牧羊業にも参入するようになった。そして羊の世話をする羊飼いとして、多くのバスク人が雇われるようになった<sup>6</sup>。Douglass and Bilbao (1975, 256)によれば、Altube 兄弟は1907年当時エルコ郊外のインデペンデンスヴァレーに40万エーカー (16万2000ヘクタール)の土地を所有し、羊2万頭、牛2万頭、馬2万頭を飼育していた。ネヴァダ州に広がる広大な公有地と乾燥した気候は、牧羊に適していた。そのため1890年頃には、Altube 兄弟以外にも、バスク人の Frank Yparraguirre や Jose Bengoechea、さらにはスコットランド移民の John G. Tayler らがエルコ郊外で牧羊業を展開した。その結果1910年頃には、インデペンデンスヴァレーを含むエルコ郡には150万頭近い羊が存在し、牧羊業者は羊群の管理のためにバスク人羊飼いを積極的に雇用した (Patterson et al. 1969, 293, 298)。こうしたバスク人羊飼いの供給は、西に隣接するカリフォルニアの牧羊業従事者をネヴァダ州のビジネスに転用することで容易に可能であったため、スムーズに進行したとされる (Douglass and Bilbao1975, 257-9)。

こうしてエルコの郊外ではバスク人羊飼いが増加したものの、彼らは牧場を拠点に羊群とともに移牧生活を送っていたために、エルコ市内に居住することはなかった。そのため1900年頃までは、エルコ市内にバスク人の痕跡はほとんど見られなかった。実際に1900年センサス集計表では、当時エルコ市内に在住したバスク姓を持つ人物は皆無であった<sup>7</sup>。しかしエルコ郊外における牧羊業の発展により、カリフォルニア経由だけでなく大陸横断鉄道経由でヨーロッパからもバスク人が呼び寄せられるようになった。その結果、1900年代に入ると鉄道駅周辺にバスク人が見られるようになった。エルコでの彼らの拠点として特に重要だったのが、移住直後のバスク人羊飼いの仮住ま

いとなる「バスクホテル Basque hotel」であった<sup>8</sup>。

#### 4. バスクホテルとバスク人

バスク人は移住先のアメリカ西部において独特のエスニックコミュニティを形成した。そもそも移民が都市に移住する場合、特に入国間もないニューカマーは英語を理解せず現地の生活に不慣れなため、同胞を頼りに限定的な空間に集住して移民街を形成する。移民街には同胞集団が集住するために、人口構成もその集団に偏り、彼らが故地から伴ってきた社会的営為が生産する独特のエスニック景観が出現する。バスク人も地縁や血縁など同胞の縁故を頼りに移住したものの、移民街を形成するには至らなかった。それは、数的規模が他のエスニック集団に比べ圧倒的に小さく、従事する職業も初期移民は羊飼いが主であり一か所に定住することがなかったためである。

それでも Echeverria (1999) は、都市内でバスク人の存在を確認できる場所を「バスクタウン Basque Town」と呼んだ。ただし彼女のいうバスクタウンは、バスク人が集住するバスク人街ではなく、都市内の鉄道駅周辺に集まる移民宿とそのネットワークにより構成される独特なものであった。バスク人が宿泊するホテルは、バスクレストランを併設することから、宿泊施設と飲食施設で構成される特殊なエスニック集住と定義したほうがよい。こうした宿泊施設と飲食施設は、経営者も宿泊客もほとんどがバスク人で、「バスクホテル」と呼ばれた。

バスクホテルは、単なる宿泊施設ではなく、バスク人のコミュニティセンターとしての役割を担った。バスク地方から直接移住したバスク人は、船で当時移民局が置かれたニューヨークのエリス島に到着し、上陸後は目的地とホテルの名前が書かれたカードを首にぶらさげ、アメリカ在住のバスク人ブローカーらの助けを得ながら大陸横断鉄道を乗り継いで目的地を目指した。目的地到着後彼らが最初に向かうのが、駅近くに立地するバスクホテルであった。バスクホテルでは、経営者をはじめ、料理人やメイドなどの従業員もバスク人のため、バスク語が彼らの共通語であり、英語を全く理解しないニューカマーのバスク人も問題なく生活することができた。彼らはバスクホテルにおいて牧羊企業経営者を紹介され、羊飼いに就労した。羊飼いとして働くようになって以降も、彼らにとってバスクホテルは一種の避難所的存在であった。彼らは1人あるいは2人で数千頭の羊群を連れて長期間の移牧を実践したが、その間現地のホスト社会と接する機会はなく、英語を習得することはなかった。彼らは子羊の出産期にあたる冬季に労働から解放されるが、その間、単身で英語に不慣れな彼らが一時的に身を寄せるのが都市部のバスクホテルであった。相部屋でバスやトイレなどの基礎的サービスは共用のため宿泊費が安価のうえ、食事も提供される下宿スタイルで、レストランではバスク地方出身の料理人が提供するバスク料理を堪能することができた。また一部のバスクホテルには、バスクの伝統球技であるペロタ Pelota の球戯場フロントン Fronton が併設されていたため、ニューカマーのバスク人は故地と同じ雰囲気を楽しむことができた。こうした生活面での利点もさることながら、彼らにとって最大の魅力は、ホテル経営者が職業案内、金融、医療など雑多な社会活動の現地社会との仲介を担ってくれたことにあった。こうしてバスク人は、バスクホテルを活用することで、現地のホスト社会と直接接することなく、社会生活を営むことが可能だっ



たのである。

エルコにおいても同様に、大陸横断鉄道の駅周辺にバスクホテルが開設され、バスク人コミュニティが形成された。そうしてバスク人が生産したエスニック景観を再現することが本稿の目的であるが、再現方法として、当時の地図を使って景観を再現するという、筆者が従来の研究（石井 2015, 2018）で採用した方法を踏襲する。そうした研究において利用したのは、サンボーン地図会社 Sanborn Map & Publish Co. が製作した火災保険地図であった<sup>9</sup>。同地図は大縮尺のうえ、各建物の用途、階数、素材などのほかに、大きな建物では各部屋の用途まで記載されており、道路名や道路の幅員、ブロックの地割、住所など、多岐にわたる情報が入手可能で、往年の都市景観の再現には最適な資料である。当然のことながら宿泊施設も特定可能である<sup>10</sup>。エルコの火災保険地図は、1885年から1927年までのものが入手可能であるが、本研究の目的がバスク人入植初期の景観再現にあることから、バスクホテルが地図上で確認できるようになった1907年版と1912年版の2つを利用して、両年の都市景観を再現することにした<sup>11</sup>。

エスニック景観の再現には、ホテルの所有者、経営者、宿泊客やその職業などの情報からコミュニティ構成を再現することも重要である。先の研究（石井 2018）では、ボイジーのバスクホテルの経営者情報や宿泊者の職業情報まで再現した。その際に利用したのが、ファーアンドスミス社 Farr & Smith とポークス社 R.L. Polk & Co. 作成の住所録であった。同住所録には氏名、住所のほかに、職業も明記されており、住所録からバスク姓とその住所、職業を抽出することで、バスクホテル滞在者とその職業属性が把握可能であった。しかし、エルコには同種の住所録が存在しないために、それに代わる資料が必要になる。そこで着目したのがセンサス集計表である。アメリカ合衆国センサス局が10年ごとに実施する国勢調査、いわゆるセンサスには、記録者が記帳した集計表が存在する。今回、エルコ管区 Elko Precinct（現在のエルコ市に相当）の1910年センサスの集計表38枚の情報を入手した。それには先住民を含め1575名の詳細な各種属性が記載されている<sup>12</sup>。その中からバスク姓を持つバスク人を抽出すれば、当時のエルコにおけるバスク人コミュニティの再現が可能である。

先の研究では、住所録以外に Echeverria (1999), Zubiri (2006) などの先行研究を利用して、経営者や開業期間などのバスクホテルに関する情報を補完した。サンボーン火災地図や住所録は特定の時間断面の記録なので経年的な情報の追跡に限界があり、それを補完するための措置であった。今回も同様の手法で情報の補完を試みるが、先行研究の情報は、しばしば時期がずれていたたり、所有者などの人物名が一致しなかったりすることがあったため、これまでの研究でも情報の扱いには慎重にならざるをえなかった。しかし今回、それを補完するに十分な情報を入手することができた。それがエルコ地方裁判所に保管されている固定資産税記録である。同記録からは、当時の不動産取引と固定資産税の納税者の情報を確認することができるため、バスクホテルの建物や土地の不動産情報を抽出すれば、所有者や取引きに関する詳細な情報が入手できる。問題は全体の情報量であり、過去のもはデジタル化されていないうえに大型書籍100冊近くを隈なくチェックする必要があった。しかし幸運にも、移民一世のバスク人で地元研究者でもある Jesus Lopategi が1900年代から

1920年代にかけてのバスク人の固定資産税納税状況や土地取引状況をすでに整理しており、今回その情報の提供を受けることができた<sup>13</sup>。これにより、先行研究に記載されているバスクホテル関連情報を確認することが可能になった。

### 5. 20世紀初頭エルコにけるバスク人のエスニック景観

20世紀初頭のエルコの中心市街地は、現在のエルコの市街図の局地的な範囲に限定される（図3）。当時の中心市街地は鉄道駅周辺に形成されたが、当時のセントラルパシフィック鉄道は、図3に示した現在の鉄道アムトラック Amtrak のカリフォルニア・ゼファー California Zephyr より4ブロック中心寄りを走っていた。その当時は、この狭い範囲にエルコの主要な機能が収まっていた。

サンボーン火災保険地図をもとに再現した20世紀初頭のエルコの中心部の詳細図を、図4と図5に示した。まず1907年のサンボーン火災保険地図を基に再現した、1907年のエルコ中心部について解説する。前述のように、1868年にセントラルパシフィック鉄道がエルコに延伸し、そこに駅が開設されたことにより市街地の開発が始まったため、1907年当時のエルコの中心市街地は、同鉄道の駅を中心に展開していた。市街地中央を東西に走る鉄道沿いが、レイルロード通り Railroad St. とコマーシャル通り Commercial St. の2本の中央通りとなり、中心市街地の南北範囲は、その北側のアイダホ通り Idaho St. から南側のシルヴァー通り Silver St. までの範囲、東西範



図3 現在のエルコ市街図.

囲は鉄道駅の西側の3番通り 3rd St. から6番通り 6th St. の、約1キロメートル四方の範囲に収まる。

1907年の火災保険地図において、ホテル名から確認できるバスクホテルは、オーヴァーランドホテル Overland Hotel とテレスコープホテル Telescope Hotel の2軒であった(図4)。オーヴァーランドホテルは、鉄道駅近くの北側、4番通りとアイダホ通りが交差する南東側ブロックの4番通り沿いに位置し、ホテル北側に屋内フロンテンを併設していた。テレスコープホテルは、鉄道駅から1つ南側のブロックの北東角、シルヴァー通り 346番地に位置した。地図中のこれら2軒のホテルの位置は、Echeverria (1999, 155) と Zubiri (2006, 318) の記述と一致している。しかし火災保険地図の情報と先行研究に示されたホテル開業年の情報が一致しない。火災保険地図では1907年時点でオーヴァーランドホテルが営業中、テレスコープホテルが建設中と記載されているのに対して、オーヴァーランドホテルの開業年を Echeverria (1999, 151), Holbert (1975, 14), Zubiri (2006, 318) とともに「1908年」としており、テレスコープホテルの開業年を Echeverria (1999, 151) が「1907年」、Zubiri (2006, 318) が「1908年」としている。

こうした記述の不一致は、地元研究家 Lopategi が調査した固定資産税記録で検証可能である。それによれば、地図の記載内容が正しいことがわかる。固定資産税記録によれば、Domingo Sabala が1906年にオーヴァーランドホテルが立地するブロックの10, 11, 12番ロットを購入し、

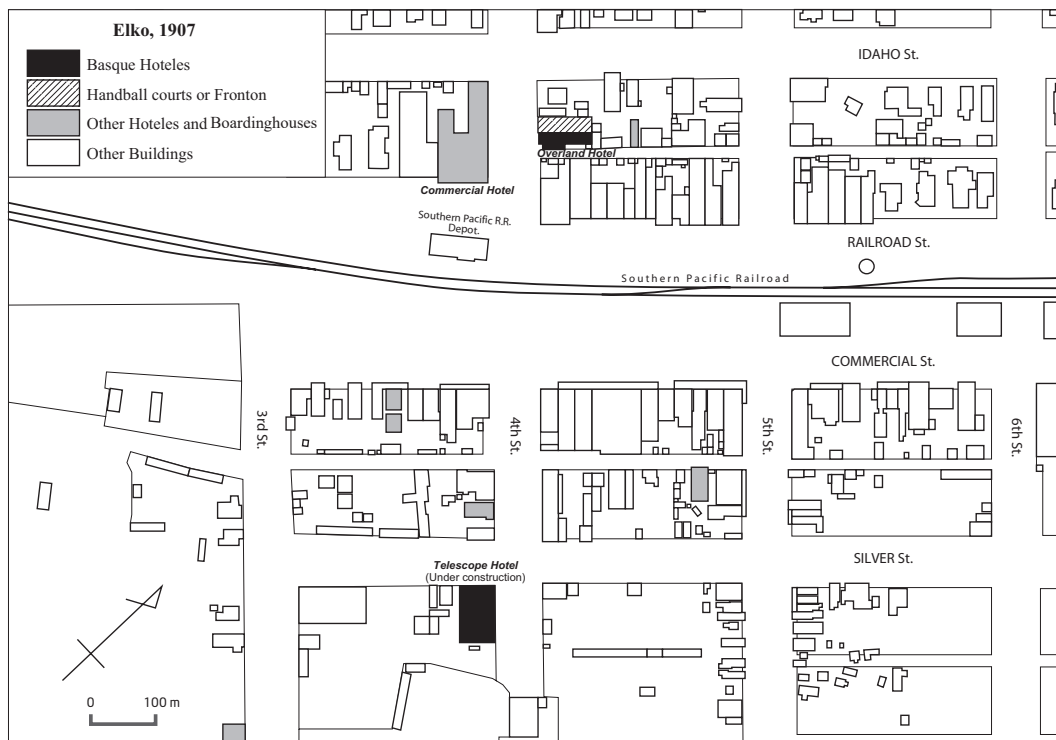


図4 1907年のエルコ中心市街地とバスクホテル。

出典： サンボーン火災保険地図などにより作成。

同ホテルを建設している。さらに Sabala は、1907 年から 1935 年まで同ロットの固定資産税を納税している。火災保険地図が作成された 1907 年当時は、固定資産税が納税されていることから、オーヴァーランドホテルが存在していたことは確かである。

テレスコープホテルの場合、固定資産税記録によれば、図 4 中の同ホテルの立地するブロックの 1～4 番ロットを Ballarena 夫妻が購入し、1907 年にはホテルとフロントンの固定資産税を納税している。火災保険地図では 1907 年当時は建設中と記載されており、同年内のホテルとフロントンの完成を受けて納税したのであろう。ただし、どうしても解決できない問題が残る。それは 1907 年に固定資産税を納税した Ballarena 夫妻がどの文献にも登場しないことである。いずれの先行研究も、同ホテルの開業者を 2 人の共同事業者 Pedro Jauregui, Guy Saval としており、Ballarena 夫妻の名前はどこにも登場しない。固定資産税記録によれば、Ballarena 夫妻は 1907 年のホテルとフロントンの税も支払っている。Ballarena 夫妻の詳細は不明のままであるが、1908 年になると固定資産税記録の中に先行研究に記載された人物が登場するようになる。それが Pedro Jauregui である。Pedro Jauregui は同年に不動産の 4 分の 1 の所有権を獲得し、ホテルの経営者になっている。この時点で先行研究にも登場する Guy Saval と共同経営を開始したのであろう<sup>14</sup>。

1912 年の市街図を示した図 5 からは、1907 年からの 5 年間にあった市街地の変化が読み取れる。最も目立つ変化は、シルヴァー通りにウエスタンパシフィック鉄道の線路が敷設され、シルヴァー



図5 1912年のエルコ中心市街地とバスクホテル。

出典： サンボーン火災保険地図などにより作成。

通りと3番通りの交差点よりやや西に、同鉄道の駅が開設されたことである。そして同駅すぐ南のブロックの北東角に、エルコで3件目となるバスクホテルであるスターホテル Star Hotel が確認できる。スターホテルの開業は、固定資産税記録と Echeverria (1999), Zubiri (2006) の先行研究ともに 1910 年で一致している。固定資産税記録によれば、スターホテルは 1910 年 10 月 10 日にスイス人実業家 Emilio Dotta からバスク人の Pedro Jauregui に売却されている。Echeverria (1999, 151) によれば、Emilio Dotta は Pedro の共同出資者である。両者の共同出資によりホテルを建設した後に Pedro が不足分を支払い、全体を購入したのであろう。Pedro Jauregui はスターホテルを 1923 年に Jose Corta と息子の Alberto Jauregui に売却するが、同ホテルはその後複数のバスク人によって受け継がれた<sup>15</sup>。

他に火災保険地図で確認できる違いとして、テレスコープホテルの西に隣接してフロントンが設置されていることである。ただしこのフロントンはホテル建設当初から存在したようである。テレスコープホテルに開業当時からフロントンが併設されていたことは、Echeverria (1999, 151), Zubiri (2006, 318) にも明記されている。図4の1907年当時の火災保険地図では、同ホテルが建設中となっていたためフロントンの存在が確認できなかったが、開業当時から存在していたようである。ただし、図5の1912年の地図に示されたフロントンの位置は開業当時と異なっている。Echeverria (1999, 151) によれば、開業当時の屋内フロントンは1911年にダンスホールに改装され、新たな屋外フロントンがホテル西側の図5に示した位置に建設されている。オーヴァーランドホテルのフロントンの位置も、図4と図5では異なる。固定資産税記録によれば、図5のフロントンに該当する9番ロットを1911年2月に Domingo Sabala とその共同経営者 Eulogio Onaindia がエルコ木材社から購入している。そこに彼らは新しい屋外フロントンを建設し、旧屋内フロントンをダンスホールに改修したのであろう。

## 6. 20世紀初頭エルコにおけるバスクホテルをめぐるバスク人コミュニティ

次に1910年センサスの集計表から、1910年当時のバスクホテルの滞在者を割り出すことを試みた。センサス集計表によれば、1910年センサスは1910年4月15日現在の情報に基づいている。その時点で営業していたバスクホテルは、オーヴァーランドホテルとテレスコープホテルの2件のみで、同年10月10日にバスク人経営者の手に渡ったスターホテルは除かれる。

作業手順として、最初にセンサス集計表に記載された1575名から、父親あるいは母親の出生地がスペインまたはフランスである者を抽出した。親の出生地に依拠して抽出した理由は、バスク地方はこれら2か国にまたがるため、バスク地方出身者は両国に籍を置く親を持つからである。また同時に、本人の出生地に注目した場合、バスク地方から移住してきた親からアメリカ合衆国内で出生したバスク人が漏れ落ちてしまうことを防ぐためでもあった。これにより58名が抽出された。念のために58名がバスク人であるかどうかを確認するために、各人の姓をバスク語アカデミーが発表したバスク姓リスト (Euskaltzaindia 2005) と照合したところ、そのリストに登場する姓と42名が一致した。1910年当時エルコに居住していたスペイン人とフランス人の8割近くがバスク

人であったといえる。さらにバスクホテルに関係するバスク人を特定するために、宿泊施設の滞在者を割り出した。具体的には、「世帯主との関係」の欄に「下宿人 Lodger」と記載された者と、それと同じ世帯に含まれる者（経営者やその家族、奉公人など）を抽出した。

上記の手順を経て明らかになった1910年当時のエルコにおけるバスクホテル滞在者が表1である。世帯主から判断できるバスクホテルは、オーヴァーランドホテルとテレスコープホテルの2軒であった。

表1 エルコにおけるバスクホテル滞在者（1910年）.

氏名*	性別	年齢	世帯主との関係	出生地	入国年	父出生地	母出生地	職業	産業
Overland Hotel									
Daniel D. Sabala	男	29	世帯主	スペイン	1899	スペイン	スペイン	経営者	ホテル
Gregoria Sabala	女	29	妻	スペイン	1904	スペイン	スペイン		
F. Sabala	男	1	子			スペイン	スペイン		
P. Sabala	男	0	子			スペイン	スペイン		
Eulogio Onaindia	男	22	共同事業者	スペイン	1903	スペイン	スペイン	経営者	ホテル
P.M.	男	30	下宿人	スペイン	1901	スペイン	スペイン	羊飼い	
J.A.	男	32	下宿人	スペイン	1904	スペイン	スペイン	羊飼い	
P.I.	男	30	下宿人	フランス	1901	フランス	フランス	羊飼い	
A.I.	女	23	下宿人	スペイン	1909	スペイン	スペイン		
N.H.	男	21	下宿人	フランス	1905	フランス	フランス	羊飼い	
M.H.	男	23	下宿人	フランス	1905	フランス	フランス	羊飼い	
M.C.	女	24	使用人	フランス	1909	フランス	フランス	料理人	ホテル
M.O.	女	25	使用人	スペイン	1910	スペイン	スペイン	給仕人	ホテル
P.U.	女	22	使用人	スペイン	1908	スペイン	スペイン	給仕人	ホテル
J.G.	男	71	使用人	フランス	1861	フランス	フランス	羊飼い	
Telescope Hotel									
Pedro Orbe	男	31	世帯主	スペイン	1896	スペイン	スペイン	経営者	
J.A. Orbe	女	26	妻	スペイン	1908	スペイン	スペイン		
D. Orbe	女	0	子			スペイン	スペイン		
P.S.	女	21	下宿人	スペイン	1909	スペイン	スペイン	料理人	ホテル
A.A.	女	21	下宿人	スペイン	1909	スペイン	スペイン	料理人	ホテル
G.A.	女	30	下宿人	スペイン	1909	スペイン	スペイン	料理人	ホテル
G.A.	男	0	下宿人			スペイン	スペイン		
T.G.	男	29	下宿人	スペイン	1902	スペイン	スペイン	バーテンダー	
M.Y.	男	31	下宿人	スペイン	1900	スペイン	スペイン	バーテンダー	
E.O.	男	28	下宿人	スペイン	1903	スペイン	スペイン	労働者	
不明									
John GG**	男	35	世帯主	フランス	1906	フランス	フランス	経営者	バー
Vicente Juaristi	男	31	共同事業者	スペイン	1901	スペイン	スペイン	経営者	バー
B.G.	男	33	下宿人	スペイン	1905	スペイン	スペイン	農場労働者	
A.G.	女	23	使用人	スペイン	1910	スペイン	スペイン	料理人	一般家庭
V.G.	男	5	下宿人	スペイン	1910	スペイン	スペイン		
T.G.	女	4	下宿人	スペイン	1910	スペイン	スペイン		
M.P.	男	33	下宿人	スペイン	1906	スペイン	スペイン	農場労働者	

\* 氏名について、個人名が他の著作などで公表されている者についてはフルネームで記載した。その家族の場合、姓はそのまま、名はイニシャルのみ記載した。他の同居人はイニシャルのみ記載した。

\*\* センサス集計表中に手書きで記入された当該人物の姓は解読不可能であった。そのため、姓の最初と最後の文字のみ記載した。

出典：1910年センサス、Elko Precinctの集計表による。

オーヴァーランドホテルの経営者は、センサス集計表には Daniel Sabala と表記されている。彼のフルネームは Daniel Domingo Sabala で、バスク人の間では Domingo Sabala として知られている。彼とその妻 Gregoria Sabala がオーヴァーランドホテルを運営していたことは、Echeverria (1999), Holbert (1975), Zubiri (2006) の先行研究にも明記されている。共同事業者としてセンサスに登場する Eulogio Onaindia は、1911 年、1913 年、1919 年の同ホテルの固定資産税記録に登場することから、1910 年当時は共同事業者として同ホテルに滞在していたのであろう。Echeverria (1999, 151) によれば、同ホテルの 1 階は葉巻カウンター、バー、ロビー、ダイニングルーム、キッチンなどの諸施設、2 階と 3 階は宿泊者用の居室 24 室と、Sabala 一家の居住スペース、使用人の居室に充てられていた。

オーヴァーランドホテルの当時の経営者である Domingo Sabala は、スペインのバスク地方ビスカヤ県の出身で、1899 年に大西洋側から大陸横断鉄道を使ってネヴァダ州に入植し、当初はエルコの西約 100 キロメートルに位置するウィネマッカ Winnemucca の牧場で働いていた (Wines 2017, 26)。Domingo は、ウィネマッカ在住の姉妹を頼りに 1904 年に移住した同郷のビスカヤ県出身の女性 Gregoria と出会った。両者は 1907 年 10 月 23 日に結婚し、エルコへ転居している (Holbert 1975, 13)。Domingo Sabala がオーヴァーランドホテルを建設したのは、ちょうど彼の結婚と前後する時期であった。

こうしてホテルビジネスを始めた Sabala 夫妻のもとには、移住直後の若い男性の羊飼いが一時的な滞在のために集まるようになった。こうした羊飼いは Domingo Sabala の仲介により、エルコ近郊の農場主を紹介され、牧羊業に従事した。ホテルは彼らのような入国間もない羊飼いの仮の住まいとなっただけでなく、冬に羊群が売却されることで一時的に労務から解放された羊飼いの滞り場所にもなった。そのためオーヴァーランドホテルには、冬季、多くの羊飼いが宿を求めて集まった (Holbert 1975, 14)。羊は冬の終わりがラミングシーズン *laming season* といわれる出産期で、春には新しい羊群が形成される。そのため、ホテルに滞在していた羊飼いは春の始まりとともにホテルを離れ農場主の元に戻り、羊飼いの業務に再び従事した。センサス集計表から読み取ることのできるオーヴァーランドホテルの 1910 年 4 月 15 日時点の宿泊者には、6 名の羊飼いが含まれる (表 1)。羊飼い 6 名という数字の規模は判断が難しいが、4 月 15 日はおそらく多くの羊飼いがオーヴァーランドホテルから牧場へ移動した後であろうし、冬季であれば、さらに多くのバスク人羊飼いが同ホテルに滞在していたことであろう。このように、エルコのバスクホテルがバスク人羊飼いを顧客としていたことが確認できた成果は大きい。

ホテルには牧羊業に従事する若いバスク人男性だけでなく、若いバスク人女性も集まった。そうした女性は、Gregoria Sabala のように血縁や地縁を頼りに移住し、バスク人が経営するホテルや飲食店の料理人、給仕、メイドなどとして働いた。表 1 に記載されたオーヴァーランドホテルの料理人と給仕人の 3 名は、全員 20 代前半のバスク人女性であった。こうしてバスクホテルは、若いバスク人男女の出会いの場にもなった。こうしたバスク人女性の多くは、宿泊客であるバスク人男性と結婚して仕事を離れるので、若いバスク人女性もバスク地方から継続的に供給された

(Holbert 1975, 14)。

テレスコープホテルに話題を変えよう。1910年時点で同ホテルに滞在するのは10名で、そのうち経営者の Pedro Orbe とその家族の計3名、ほか7名がすべて下宿人となっている。下宿人7名のうち、5名が料理人とバーテンダーで、いずれもホテル内の業務に従事する労働者であり、残り2名のうち1名はイニシャル A.A. と G.A. の0歳の子供であるので、ホテル外の仕事に従事するのは職業「労働者 Labor」の1名のみである。こうした構成を鑑みれば、1910年センサスで読み取ることのできるテレスコープホテルの滞行者構成は、おそらく冬季に宿泊していた羊飼いが退去した後の状況を反映しているのであろう。

テレスコープホテルの経営者について、固定資産税記録には詳しい記述がないものの、Echeverria (1999, 151) には「Jauregui と Saval はこのビジネスを Francisco Goicoechea と Juliana Goicoechea の夫妻、Martin Inda, Pedro Orbe に (1910年に) 売却した」とあり、ここではじめてセンサス集計表に記載された経営者 Pedro Orbe の名前が出てくる。ただし売却の事情は込み入っていたようである。Patterson (1969, 302) によれば、ホテルの経営者となった Francisco Goicoechea は、妻となる Juliana をスペインに残した状態で結婚したが、妻は当時の羊戦争 Sheep Wars に夫 Francisco が巻き込まれることを懸念して渡米し、夫に対して牧羊業者である Guy Saval との牧場共同経営から撤退するよう説得し、その結果 Goicoechea 夫妻は、Martin India と Pedro Orbe とともにテレスコープホテルのビジネスに参加したとある<sup>16</sup>。バスク人の牧羊ビジネスやホテルビジネスには、同胞間の強固な結束がみられ、それが同胞によるビジネスの占有と同胞の連帯強化につながったのであるが、その強い結束は時としてこうした衝突を含み持っていたのであろう。

1900年代末のテレスコープホテルの共同経営者である Pedro Jauregui と Guy Saval の関係も、ほぼ同じ時期に破綻していたようである。Echeverria (1999, 51) によれば、Pedro Jauregui がスペインバスク地方ビスカヤ県からの移民 Matilde と結婚して数か月後の1910年に、彼は Saval とのテレスコープホテル共同経営を解消している。そして Pedro Jauregui は、テレスコープホテル売却と同じ年の1910年に、スターホテルを建設している。彼が携わったスターホテルは、後にアメリカ西部に住むバスク人の間に知れ渡ったホテルに成長し、最盛期にはダンスパーティーや結婚式も行われた。Pedro Jauregui のように複数のバスクホテルの経営に関わる者は、オテロ Hotelero と呼ばれた。オテロは、複数の都市や時には州を越えたオテロ間のネットワークを通じて、羊飼いやメイドの雇用情報をやり取りした。こうしてオテロは、バスクホテルを通じたバスク人の同胞ネットワークを広域に展開することで、アメリカ西部に分散したバスク人を同胞ネットワークに効率的に取り込むことに貢献した (Echeverria 1989)。

1910年センサスの集計表で、バスク人の下宿人を抱えながらも宿泊施設名が不明なものがひとつあった。それが表1の最下段にあるバーである。センサス集計表の業態欄には Saloon と記載されている。経営者のフランス人は名が John であるが姓は解読不能で、個人を特定不可能であった。共同経営者はスペインバスク人の Vicente Juaristi とある。しかし彼の記録がほとんど残っていない



い。ほぼ唯一といえる記録には、Vicente Juaristiは1899年にスペインから移住し、当初はウィネマッカで牧羊に従事したが、後にエルコ郡に移り、エルコ北西のウィロー川沿いの640エーカーの土地を購入し、約6000頭の羊を飼育したとある（Patterson 1969, 305）。典型的な牧羊事業者だったようであるが、エルコ市内でビジネスに参入したという記録が見当たらない。しかし1910年センサスの記録に従えば、世帯主であるフランス人のビジネスに共同出資していた。当時は、同郷の移民にバーや飲食店の一角を居住スペースとして提供するという行為が一般的に行われていた。そもそも移民のホテル業は、このようにして始まったともいえる。滞在者は下宿人と使用人を合わせて5名であるが、その構成は夫婦（イニシャルB.G.とA.G.の夫妻）とその子供2名（V.G.とT.G.）、その家族以外には1名の農場労働者Farm laborという小規模なものである。おそらく彼らは、スペインバスク出身であるVicente Juaristiの地縁か遠い血縁を頼りに、ここに身を寄せたのであろう。ところで、Jose JuaristiとBernard Yanciという人物が1959年にスターホテルを購入し、1964年に他のバスク人に売却するまで同ホテルを経営するが、Vicente JuaristiはこのJose Juaristiの伯父にあたる。バスク人牧羊事業者がバスクホテル経営に関わるのは、先のGuy SavalやFrancisco Goicoecheaもそうであったように、こうした事例はバスクホテル経営が牧羊ビジネスと深い関係にあったことを裏付けている。

## 7. おわりに

20世紀初頭のエルコにおいてバスク人が生産したエスニック景観には、バスク人によるバスクホテル経営やその背後にある牧羊業の占有に代表されるエスニックビジネスの存在をみてとることができた。観点を変えれば、彼らはこうしたエスニックビジネスにおける「移民起業家 immigrant entrepreneur」と言い換えることができる。移民は通常移住先のホスト社会の中で確保した経済的ニッチに属する業種を占有するために、近縁の業種で起業することが多い。例えばバスク人の場合であれば、バスクホテルのほかに、バスクレストランやバスク人が経営するバーなどの飲食業のように、経営形態の近い業種が該当する。

しかし、今回の研究でバスクホテルの背後にみえてきたのは、バスク人がアメリカ西部に移住して間もない時期に参入した牧羊業の存在との関係であった。20世紀初頭のエルコにおいてバスクホテルの経営に関係したバスク人起業家は、ホテル業に参入する以前に少なからず牧羊業を経験していた。エルコはそもそも鉱山開発の拠点として開発された都市で、19世紀末から鉱業関係者が集積した。そうした中で、この地域の産業としては鉱業に比べてはるかに収益性の低い牧羊業において十分な労働者を確保するためには、移民労働者の生活と労働の拠点となる宿泊施設を管理することが、彼らにとって必須であったといえる。こうして彼らは、異業種間に同胞ネットワークを拡張することで、雇用の需要情報を集め、供給をコントロールしていたのである。

エルコに形成された初期のバスク人コミュニティは、地理的に影響の及ぶ範囲が都市内に限定されないことにも特徴があった。バスクホテルを拠点にエルコ市内に形成された都市的バスク人コミュニティは、その背後にエルコ郡とその周辺に広がるバスク人の牧羊起業家と羊飼いが結ぶ広域

的なバスク人コミュニティと連動していた。そしてエルコとその近郊に形成されたコミュニティは、彼らのアメリカ西部進出の出発点であるカリフォルニアともつながり、広範な羊飼い供給網が形成されていた。こうしてアメリカ西部を包括するバスク人コミュニティは、カリフォルニアへの初期のバスク人供給地であったラプラタ川流域や、その後大陸横断鉄道経由で故地のバスク地方とも繋がるトランスナショナルなコミュニティでもあったのである。

こうした広範な空間を連動するコミュニティの形成が可能だったのは、彼らの強い同胞意識であり、それにより強化された彼らの間のネットワークが、強固な「エスニックな結束 ethnic solidarity」を醸成したからである。こうしたエスニックな結束は、バスク人が往来を続けた1970年代ごろまでは盤石であり、その間バスクホテルも、バスク人経営者の間で引き継がれた。テレスコープホテルは世界恐慌の影響で1936年にバスク人以外に売却されたものの、オーヴァーランドホテルは1970年代まで、スターホテルに至っては2004年までバスク人経営者のもとで営業が続けられた。この間、これらのホテル以外にも、途絶えることなく供給が続くバスク人移民のために、バスク人が経営するネヴァダホテル Nevada Hotel (1925 - 1960s), クリフトンホテル Clifton Hotel (1930s - 不明) が登場した<sup>17</sup>。

1970年代に入るとバスク人移民は急速に減少し、彼らを前提に成り立つバスクホテルや牧羊業は衰退した。同様に、これらを前提に成立していたバスク人のエスニックな結束も弱体化した。移民一世から情報を収集できる時間もほとんど残されていないこの時期に調査を実施し、バスク人がかつて生産したエスニック景観を、移民一世から収集した情報を基に補強して再生産できたことは、相当に幸運だったといえる。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所の研究助成を受けた。Jesus Lopategui氏をはじめ、エルコ在住のバスク人、その他様々な機関や多くの方々から貴重な情報を提供していただいた。ここに記して深く御礼申し上げます。

## 注

- 1 こうしたバスク人のアルゼンチン入植は政策的に進められた面もある。例えば、当時のアルゼンチンの政治家フリオ・アルヘンティノ・ロカJulio Argentino Roca (1880-86, 1898-1904は大統領も務めた)は、アルゼンチン内陸へバスク人を含むヨーロッパ人の入植を進める目的で各種の補助金や手当を支給した。またSarramonte (1995, 193)によれば、アルゼンチンから移民仲介業者がバスク地方に送られ、農山村地域においてアルゼンチン移住のリクルート活動が行われていた。
- 2 カルリスタ戦争で新大陸に移住したバスク人には、医療関係者や法曹家などの専門職集団が含まれた。ちょうど第三次カルリスタ戦争の終戦と同じ1876年に、バスク3県のフェロスが撤廃され、それに反発する知識階級はナショナリズム運動を展開するようになった。こうした動きと連動して、19世紀後半のバスク地方では、サビノ・アラナSabino Aranaが中心となってバスク民族主義党が結党された。これに呼応するかのようには、カルリスタ戦争時にディアスポラへ移住した知識人の一部は、新大陸でバスクディアスポラの政治的組織化を進め、ちょうどこの当時、ウルグアイやアルゼンチンで政治活動の拠点となるバスクセンターの設立が見られるようになった (Douglass 2003, 71)。

- 3 バスク人羊飼いの報酬は、当初は移牧の過程で生まれた子羊があてがわれることが多かった (Douglass and Bilbao 1975, 225-226)。子羊を得たバスク人羊飼いは、3年から4年間移牧に従事することで、十分な羊群を形成した。そして地縁血縁を頼りに移住してくるバスク人移民に子羊を与えることで、新規移民が牧羊業に容易に参入することを可能にした。こうして連鎖移民ネットワークが漸次補強された。
- 4 McCullough (1945) は、Silen (1917) の古典を引用して、エルコ近郊に入植して牧場経営を行うようになったバスク人として、Bilbino Achabal, Bernardo Altube, Pedro Altube, Miguel Arregui, Pedro Corta, Pedro Jauregui, J.M. Legorza Domingo Sabala,らを挙げている。このうちBernardo AltubeとPedro Altubeの兄弟と、Domingo Sabalaは後に大地主となり、バスク人コミュニティにも大きな影響を与えるようになる。
- 5 Miller & Luxは、「カリフォルニアの牧牛王Cattle King of California」と呼ばれたドイツ系のHenry Millerと、同じくドイツ系のCharles Luxが経営した。彼らはカリフォルニア州、ネヴァダ州、オレゴン州の5万7000平方キロメートルの土地を所有していたといわれる。さらにMiller & Luxは1870年代に牧羊業にも参入し、1880年代にはカリフォルニアのロスバノスLos Banosを拠点に、北はフレズノ郡のフェアバー Firebaughから南はカーン郡のボタンウィロー Button Willowに至る移牧ルートを確立した (Wentworth 1948, 196)。
- 6 ほぼ同じ時期に活躍したバスク人パイオニアとして、Garat一族も有名である。Jean Garatは1850年代初めにカリフォルニア州の鉱山キャンプに食肉を提供する牧場をサンホアキンヴァレーで開業したが、Miller & Luxとの競合から、1870年代にはエルコ近郊のインデペンデンスヴァレーへ移り、スパニッシュランチ近くに牧場YPランチを開業した。YPランチは1880年代には肉牛約7万頭を飼育する大牧場に成長した。1889年の厳冬で大きな経済的損失を経験したが、彼らはAltube兄弟と異なり、その後も牧牛業を中心にビジネスを展開した。
- 7 1900年センサス集計表によれば、父あるいは母がスペインあるいはフランスを出生地とする者は1名のみであり、それはフランス人を父 (母はドイツ人) に持つ者であった。しかしその姓はKussleで、バスク姓ではなかった。
- 8 英語のBasque Hotelに対応するが、相部屋で食事付きのために、「下宿」に相当する用語Boardinghouseが充てられ、一般的にはBasque Boardinghouseと呼ばれた。
- 9 サンボーン地図会社はサンボーンD. A. Sanbornによって1867年に設立された。サンボーン社は設立以降、アメリカ合衆国内の地図作製業者を吸収合併し、19世紀末には国内で独占的な地位を築いた。1970年代まで作成され続けた地図は、国内1万2000以上の都市で、100万葉を超えるといわれる。
- 10 サンボーン火災保険地図には、大規模なホテルについてはホテル名がそのまま記載されている。エルコの地図では、バスクホテルに該当するものにホテル名が記載されていたので、判別が容易であった。しかし念のために小規模な宿泊施設もすべて地図上に示すことにした。そうした宿泊施設には単にHotelと記入されているものが多い。ただしHotelと記入されている建物のみが宿泊施設ではない。したがって当時の宿泊施設を表現する用語であるBoardinghouse, Furnished room, Roomsなどが記入された建物は、すべて宿泊施設と判断し、図中に明記することにした。
- 11 実際に入手可能なのは、1885年、1890年、1897年、1904年、1907年、1912年、1927年のものである。1885年から1912年にかけての地図は、連邦議会図書館のオンラインアーカイブからも入手可能である。今回、1912年と1927年の地図はエルコのNortheastern Nevada Museum所蔵のものを複写して入手した。1907年の地図は連邦議会図書館所蔵のアーカイブのデータを利用した。
- 12 ただし1910年センサスには、住所情報が記載されていなかった。そのため居住場所の特定には、他の情報と照合してすり合わせる必要が生じた。
- 13 Lopategi氏は、エルコ地方裁判所の公文書データから、過去のバスク人による固定資産税の支払い状況や不動産取引状況に関する情報を整理した。2019年10月の現地調査でLopategi氏と直接面会し、彼が取得した情報の使用許可を得た。
- 14 Guy Sabalは、エルコの北側ガンス川Gance Creek沿いの牧場を購入し、牧羊業にも従事していた。彼の兄John SavalとJoe Savalも牧羊事業者で、1892年に移住後ウイネマッカ近郊でスコットランド系のJohn G. Taylorの牧場で8年間働き、1900年に独立した。Saval兄弟の牧場は、エルコ郡とそれに隣接するエウレカEureka郡、ランダーLander郡までの広大な面積を占めた (Patterson1969, 300)。
- 15 スターホテルは、現在はバスク人所有ではないものの、バスクレストランとして営業を続けている。土曜日のラ

ンチにはLopategiをはじめ、かつて羊飼いとしてこのホテルを利用していたバスク人がこのレストランに集う。彼らはバーフロアでバスクのカードゲームであるムスを興じた後、正午にレストラン側が彼らのために特別に鳴らす鐘に合わせてレストランに入場し、かつてのスタイルで食事をとることを現在でも習慣としている。

- 16 羊戦争Sheep Wars or Sheep and Cattle Warsは、19世紀末から20世紀初めにかけて、アメリカ西部諸州であった羊飼いと牧牛業者との対立である。羊飼いは羊を伴って広大な牧草地を移動するが、牧牛業者は牧草地を荒らす侵入者として彼らを排除し、1920年頃までの50年間に50人以上が殺害され、10万頭を超える羊が殺されたといわれる。
- 17 クリフトンホテルは、Zubiri (2006, 318)によれば1888年頃には営業していた古いホテルであるが、当時の経営者はバスク人ではなかった。バスク人のPlaza一家が営業した1930年代から1940年代は常に羊飼いで満室だった。1960年にはバスク人のErrecart夫妻が購入し営業したが、閉業年は不明である。

#### 参考文献

- 石井久生 (2015) : 「バスク・ホテルにみるバスクのトランスナショナル社会空間——ボイジャーとベーカーズフィールドの事例」『共立国際研究』32, : 43-70.
- 石井久生 (2018) : 「アメリカ西部のバスク人とアイダホ州ボイジャーのバスク博物館」矢ヶ崎典孝編『移民社会アメリカの記憶と継承——移民博物館で読み解く世界の博物館アメリカ』学文社, pp. 186-219.
- Álvarez, Ó. 2002. "Los vascos de Buenos Aires a la luz del censo de 1855," In Ó. Alvarez and A. Angulo (eds.) *Las migraciones vascas en perspectiva histórica (siglo XVI-XX)*. Vitoria-Gasteiz: UPV/EHU, pp. 139-178.
- Douglass, W.A. (2003): *La vasconia global: Ensayos sobre las diásporas vascas*. Vitoria-Gasteiz: Eusko Jaurlaritzaren Argitalpen Zerbitzu Nagusia.
- Douglass, W.A. and J. Bilbao, (1975) : *Amerikanuak: Basques in the New World*. Reno, Nevada: University of Nevada Press.
- Echeverria, J. (1989): "California's Basque Hotels and Their Hoteleros," In W.A. Douglass (ed.) *Essays in Basque Social Anthropology and History*. Reno, Nevada: University of Nevada Press, pp. 149-176.
- Echeverria, J. (1999): *Home Away from Home: A History of Basque Boardinghouses*. Reno, Nevada: University of Nevada Press.
- Euskaltzaindia (2005): *Euskal deiturak*. Vitoria-Gasteiz: Euskaltzaindia.
- Hall, S. (2002): *Connecting the West: Historic Railroad Stops and Stage Stations of Elko County*. Reno, Nevada :University of Nevada Press.
- Holbert, G. (1975): "Elko's Overland Hotel: A Family, a Culture and a Memory," *Northeastern Nevada Historical Society Quarterly* 5(3): 13-20.
- McCullough, F.M. (1945): *The Basques in the Northwest*. PhD dissertation, University of Portland.
- Patterson, E.B., L.A. Ulph and V. Goodwin (1969): *Nevada's Northeast Frontier*. Sparks, Nevada: Western Printing & Publishing.
- Saitua, I (2019): *Basque Immigrants and Nevada's Sheep Industry: Geopolitics and the Making of an Agricultural Workforce, 1880-1954*. Reno, Nevada: University of Nevada Press.
- Sarramone, A. (1995). *Los Abuelos Vascos en el Rio de la Plata*. Buenos Aires: Editorial Biblos Azul.
- Silen, S. (1917): *La historia de Los Vascongados en el Oeste de los Estados Unidos*. New York: Las Novedades.
- Totoricagüena, G. P. (2005): *Basque Diaspora: Migration and Transnational Identity*. Reno, Nevada: Center for Basque Studies, University of Nevada.
- Wentworth, E.N. (1948): *America's Sheep Trails: History, Personalities*. Ames, Iowa: The Iowa State College Press.
- Wines, C. (2017): *Hidden History of Elko County*. Reno, Nevada: Arcadia Publishing.
- Zubiri, N. (2006): *A Travel Guide to Basque America: Families, Feasts, and Festivals*. 2nd edition, Reno, Nevada: University of Nevada Press.